

62 『范汪方』について

浦山 きか

I 問題の所在

『范汪方』は、四世紀半ばに編纂されたと考えられる佚医書である。『隋書』経籍志・医方類には『范東陽方』一百五巻があり、『旧唐書』経籍志・医術類には『雜藥方』一百七十巻。范汪方、尹穆撰が記され、『新唐書』藝文志・医術類には「尹穆纂范東陽『雜藥方』一百七十巻」が見えている。以後は『証類本草』に引用されるほか、『通志』藝文略・医方類に「范汪方」一百七十巻」と名を留める。『太平御覧』引『晋書』に「范汪」撰方五百余巻、又一百七巻」とあり、陶弘景『本草經集注』序に「『范汪方』百余巻」とある。巻数は一定しないが、大部の総合的医書と推測される。著者范汪については『晋書』卷七十五に伝があり、三百七十年代初に六十五歳で没したものと推定される。

『范汪方』の佚文は、『外台秘要方』（以下「外台」と略す）『医心方』『証類本草』『座右抄』に保存されるほか、敦煌出土資料中にも類似の処方が見られる。佚文の引用状況を検討することにより、二つの方向へ問題が展開する。一つは、『范汪方』の復元の可能性をさぐる方向であり、一つは『范汪方』を引用している書籍の『范汪方』に対する評価である。その二点について報告する。

II 『范汪方』佚文の引用状況

『范汪方』佚文を保存する医書の構成自体が異なるため、共通点は見出しにくい。『座右抄』は「三十日人神」のみ保存する。『証類本草』は、『范汪方』或いは「范汪」の名で数例を保存するほか、所引の『図経本草』等の記載中にも保存する。『外台』の引用は条文頭に『范汪方』を記すものについては元の巻数も保存しており、これが百七十一条あるほか、条文中に引用するものが二百七十一回を数える。『外台』は応用的な処方として『范汪方』から引用する傾向にあり、引用率の高い巻としては『外台』卷二十の「水病二十六門」で、全処方百二十二のうち十七条を『范汪方』から引用し、かつ他書の引用

中にも十一回『范汪方』を挙げる。次いで『外台』巻二十七「淋并大小便難病二十七門」では、条文頭に二十七条、条文中に十五回の引用がある。これは『外台』の、『范汪方』の「九竅」の病というべきものへの評価の高さを示していると言える。『医心方』中の佚文は「今按」として引用される書式のものも含めれば百五十九条を数え、引用の多い巻としては、巻一「治病大体」（今按二十六回）、巻五「治耳聾方」（二十回、今按一回）、巻十一「治霍乱方」（十二回）、巻十「治積聚方」（十回、今按二回）巻十四「治卒死方」（十一回）が挙げられる。『外台』とは引用する処方の種類が異なっており、主要な処方にも『范汪方』を引用する。

III 『范汪方』の復元と構成

『外台』の巻題を借りて『范汪方』の構成を復元する。巻頭は「巻一・中風門」からで、「巻三・傷寒門」に続く。巻四以下は霍乱・虚劳・温病などが続くが、巻十五に「痢門」を収めて以後、水病や大小便難などに対して記述が続く。巻三十以降では黄疽や癰疽への記述が配されてきたと推定される。『外台』の引用しない人神の記

載などは『范汪方』の最後尾である九十五巻以降に付されていた可能性があるが、鍼・灸ともに記載していたかは不明である。全体的には隋唐の医学全書の体裁に近い。道教の服薬に関する記述は、『外台』『医心方』いずれにも保存されていないが、採るべき内容がなかったためか、元来『范汪方』が収録しなかったためかは不明である。

IV 考 察

『范汪方』は、隋唐の総合的医書の構成によって編纂された大部の医学全書で、中風・傷寒から霍乱・黄疽、さらには鍼灸の禁忌まで幅広く収めたものと考えられる。『外台秘要方』には水病・九竅の病についての引用が多く保存され、『医心方』には基礎的な文献として引用されるなど、後世に一定の影響を与えたといえよう。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)